樋越遺跡

昭和61年

前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財調査団

序

榛名山、赤城山、谷川連峰を背後にひかえ上野国分寺の７重の塔、建築物の甍を望み、推定上野国国府域の東側に位置し、すぐ南には推定東山道が東西に通っている地である。

この地に三井興業株式会社の８階建の本社屋の移転が計画された。それに伴う調査である。

調査の結果、約２ｍに及ぶ溝が発見された上に木杭がみつかっている。土坑、溝、らせん状暗文を有する土器等が発見されている。

この調査にかかわった山武考古学研究所、調査に全面的協力をいただいた三井興業株式会社、調査担当者、作業員の方々に感謝を申し上げます。

本報告書を刊行できたことは斯学の発展のため少しでも寄与できれば幸いと存じます。

昭和61年３月20日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長　奈良　三郎

例　　言

1．本書は前橋市元総社町の三井興業本社社屋及テナントビル、附帯駐車場棟の建設に伴う事前発掘調査の報告書である。

2．発掘は前橋市教育委員会指導のもと山武考古学研究所が担当し、現地調査は同研究所所員肥田順一が行なった。

3．遺跡の所在地は群馬県前橋市元総社町１丁目２番地である。

4．調査は昭和60年９月17日から11月13日までの58日間にわたって実施した。

5．本書の遺物・図面の整理は肥田順一が担当し、石井百々子の協力を得た。本書の執筆は第１章を福田紀雄、他を肥田順一が担当した。

6．本書の編集は肥田順一が行なった。

7．発掘調査から本書刊行に至るまで、下記の機関、諸氏の指導、助言を賜った。記して感謝の意を表する。

前橋市教育委員会、三井興業株式会社

8．発掘調査参加者（敬称略五十音順）

飯塚昭子　石田洋子　岩田四郎　加藤八重子　金井福次郎　木村妙子　木村本次郎
小暮トミ　信沢長治　松田隆次　柳原久仁江

凡　　例

1．各遺溝の略号は次の通りである。

D…土坑　W…溝　G…グリッド

2．実測図の縮尺は次の通りである。

全体図 1/400　溝1/80　土坑1/60　土器 1/3　古銭 1/3

3．スクリントーンを貼付した部分は遺構の図では撹乱を、また遺物の図では灰釉及び黒色処理の遺物をそれぞれ示している。

4．本調査部分とトレンチ部分のグリッド番号を統一するため、発掘調査時のグリッド番号を変更した。

１Ｇ→ｄ－２Ｇ　２Ｇ→ｅ－２Ｇ　３Ｇ→ｆ－２Ｇ　４Ｇ→ｄ－３Ｇ　５Ｇ→ｅ－３Ｇ
６Ｇ→ｆ－３Ｇ　１トレ(1)→ａ－１Ｇ　１トレ(2)→ｂ－１Ｇ　１トレ(3)→ｃ－１Ｇ
２トレ(1)・３トレ(1)→ａ－２Ｇ　２トレ(2)・３トレ(2)→ｂ－２Ｇ　２トレ(3)・３トレ(3)→ｃ－２Ｇ

目　　次

序
例言
凡例
目次
第１章　調査に至る経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 2
第１節　自然環境 …… 2
第２節　歴史的環境 …… 2
第３章　調査の経過 …… 4
第１節　調査の方法 …… 4
第２節　標準土層 …… 4
第３節　調査日誌抄 …… 4
第４章　検出された遺構と遺物 … 6
第１節　溝 …… 6
第２節　土坑 …… 7
第３節　遺物包含層 …… 9
第４節　トレンチ …… 11
第５章　まとめ …… 12

挿図目次

第１図　樋越遺跡とその周辺 …… 3
第２図　標準土層 …… 4
第３図　遺跡全体図 …… 5
第４図　１号溝・同出土遺物 …… 6
第５図　土坑 …… 7
第６図　３号土坑出土遺物 …… 8
第７図　包含層出土遺物(1) …… 9
第８図　包含層出土遺物(2) …… 10
第９図　トレンチ出土遺物 …… 12

表目次

第１表　１号溝出土遺物観察表 …… 7
第２表　３号土坑出土遺物観察表 … 8
第３表　包含層出土遺物観察表 …… 10

図版目次

図版１ …… 13
1　調査区全景
2　１号溝完掘状況
3　包含層遺物出土状況
4　土坑完掘状況
5　２号溝確認状況
6　３号 溝・16号土坑確認状況
図版２　出土遺物 …… 14

第１章　調査に至る経過

60. 4. 7　建築指導課より元総社１丁目２番地（ 1,461.6㎡）の民間開発に伴う協議依頼が提出される。同じく事業者、三井興業株式会社代表取締役・七里望氏より表面調査依頼を受ける。

60. 5. 24　表面調査実施。当該地は盛土され遺物採取は不可能であったが、元総社地区は国府・国分寺・総社神社等古代上野の国の中心となっていた所である為試掘調査の必要があり、その旨を建築指導課及び事業者に回答。

60. 6. 18　試掘調査実施。トレンチ３条を入れた結果、平安時代の遺物包含層・土坑・溝・土師器・須恵器を検出。

60. 6. 24　試掘調査結果を建築指導課及び事業者に回答。

60. 7. 5　事業者より発掘調査依頼が提出される。

60. 9. 10　前橋市埋蔵文化財発掘調査団受託事業とし、現場調査は山武考古学研究所へ委託。委託契約書の締結、調査期間は９月11日から61年２月28日とする。

60. 9. 11　調査着手。

第２章　位置と環境〔第１図〕

第１節　自然環境

樋越遺跡は前橋市元総社町に所在し、国鉄上越線新前橋駅の北方約１kmの地点に位置する。本遺跡の立地する前橋台地は、前橋市の南西部を占めるほぼ平坦な洪積台地である。台地北西部の清里地域は榛名山東麓斜面の移行部を形成し、榛名山中に源を発する中小河川が台地を細長く分断して微高地を作り上げている。遺跡は榛名山水系の牛池川と八幡川に挟まれ、南東に流れる両河川がこの付近で流路を南方に取り、牛池川は染谷川に合流し、八幡川は利根川に併行して流れる。

遺跡の南約 150ｍには国道17号線が走り、周囲は市街地化されて、旧状をみることは困難である。調査区は、旧水田面より約80cmの盛土によって埋められていたが、水田に適した湿潤な土地であったらしい。東方は牛池川や染谷川によって形成された高燥な台地となり、畑地が広がっている。 西方１kmには利根川が流れ、現利根川氾濫原が存在する。 標高は旧水田面で約111ｍあり、東南に緩やかに傾斜している。

第２節　歴史的環境

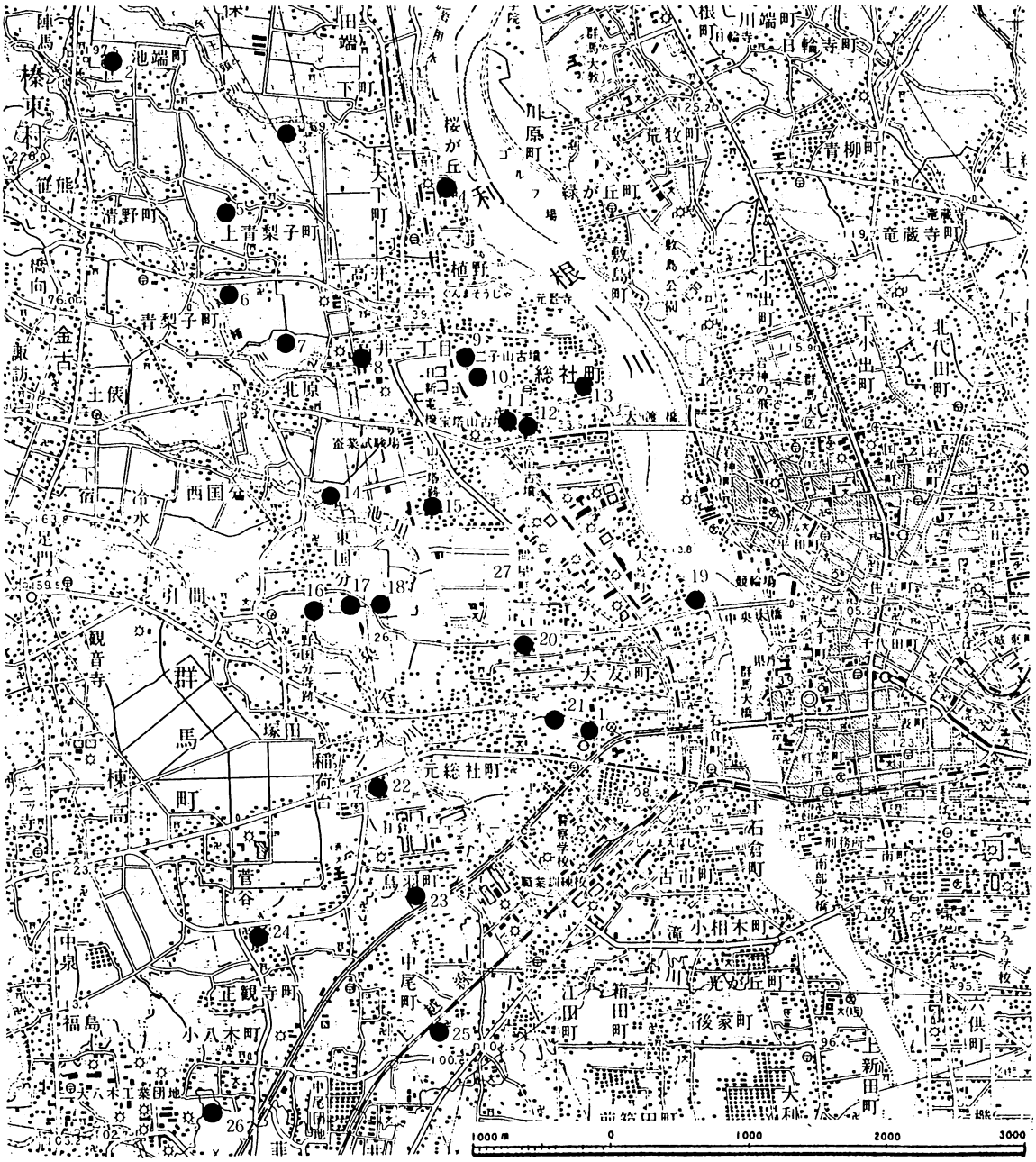
樋越遺跡周辺は上野国府に近く、古代上野国の政治、文化の中心地として発達した重要な地域である。関係する遺跡が濃密に分布するほか、縄文、弥生時代の遺跡も多い。

縄文時代では、下東西、清里陣場、庚塚、国分境の各遺跡が知られているほか、国分寺中間地域遺跡では前期・中期の住居址が発掘されている。

弥生時代では、国分寺中間地域、下東西、正観寺、日高遺跡などで住居址、水田址、方形周溝墓、館跡が検出されている。

古墳時代には、初現期の横穴石室をもつ王山古墳をはじめとし、東国でも有数な古墳群の１つである総社古墳群が遺跡地の北約２kmに存在する。総社二子山古墳を筆頭に終末期の古墳である宝塔山古墳、蛇穴山古墳が知られている。

奈良・平安時代になると上野国府、上野国分僧寺、上野国分尼寺、さらに山王廃寺の建設とあいまって、当地域は上野国の中枢地域としての様相を帯びてくる。これと伴って周辺に大規模な集落が出現し、清里陣場遺跡、下東西遺跡、国分寺中間地域遺跡、柿木遺跡、国分境遺跡、中尾遺跡、鳥羽遺跡などで、奈良・平安時代の集落が検出されている。本遺跡の西方約 350ｍの台地に元総社明神遺跡が存在する。



1. 樋越遺跡　2. 清里・陣馬遺跡　3. 長久保遺跡　4. 総社桜ケ丘遺跡

5. 庚申塚遺跡　6. 清里南部・中島遺跡　7. 下東西遺跡　8. 柿木遺跡

9. 総社二子山古墳　10. 愛宕山古墳　11. 宝塔山古墳　12. 蛇穴山古墳

13. 遠見山古墳　14. 国府境遺跡　15. 山王廃寺　16. 国分僧寺

17. 国分寺中間地域遺跡　18. 国分尼寺　19. 王山古墳　20. 閑泉樋遺跡

21. 元総社明神遺跡　22. 島羽遺跡　23. 中尾遺跡　24. 正観寺遺跡

25. 日高遺跡　26. 大八木遺跡　27. 国府推定地域

第1図　樋越遺跡とその周辺

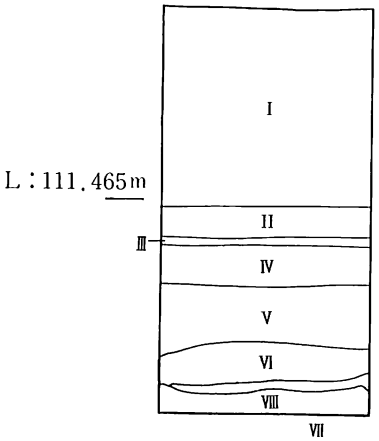
第3章　調査の経過

第1節　調査の方法

本調査は前橋市教育委員会によって行なわれた試掘調査に基づいて発掘範囲を決定した。対象面積1461.6㎡のうち、社屋の建設される調査区東部の 300㎡を全面発掘し、駐車場棟の建つ西部 180㎡をトレンチによる確認調査とした。調査区は10m四方のグリッドに区分して、南北方向の西端よりアルファベッドでａ・ｂ……、東西方向を北端より算用数字で１・２・３とした。溝は調査区の南端、北端および中央で土層観察を行なった。覆土中の遺物は一括して取り上げ、包含層．トレンチの遺物はグリッドで取り上げた。

第2節　標準土層　〔第2図〕

本遺跡ではⅠ層からⅧ層までの標準土層を確認した。各層は次の通りである。



第2図　標準土層

Ⅰ層　〔灰白色〕近代の盛土。

Ⅱ層　〔黒褐色〕旧水田の耕作土。締まり、粘性有り。

Ⅲ層　〔赤褐色〕酸化鉄を帯びた旧水田の耕作土。締まり良好、粘性不良。

Ⅳ層　〔灰褐色〕粒径の大きい砂を多く含む。やや酸化鉄を帯びる。白色の軽石を微量に含む。締まり、粘性良好。

Ⅴ層　〔灰褐色〕（Ⅳ層より黒色）白色の軽石を少量含む。締まり良好、粘性不良。

Ⅵ層　〔黒褐色〕白色の軽石を微量に含む。締まり、粘性良好。

Ⅶ層　〔黄白色〕砂層。締まり、粘性不良。

Ⅷ層　〔明灰褐色〕砂泥層。締まり、粘性良好。

第3節　調査日誌抄

調査は昭和60年９月17日から11月13日にわたって実施した。

９月17日　表土剝ぎを開始。

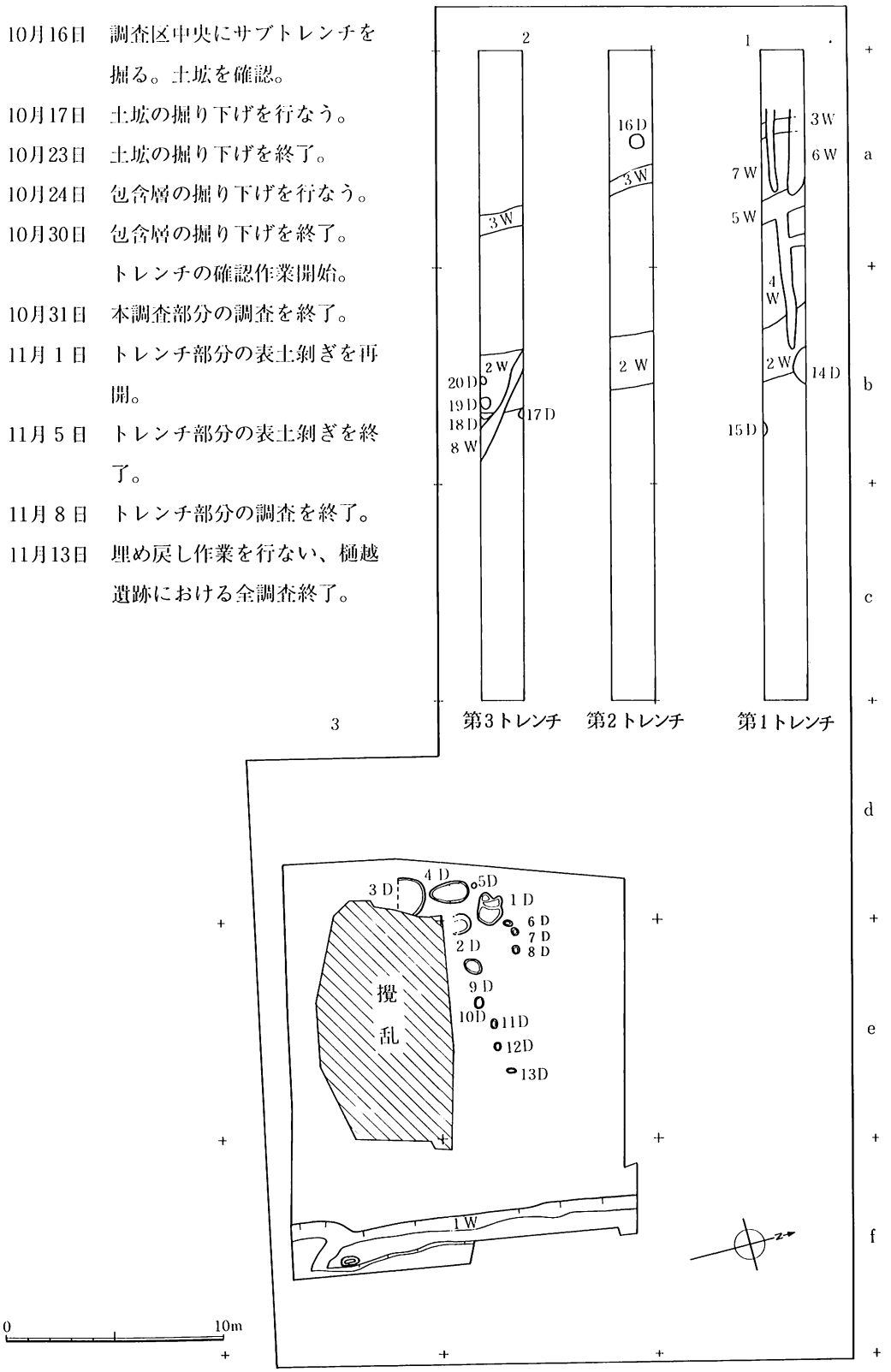
９月20日　排土場所が少ない為、表土剝ぎを一時中断。

９月27日　確認作業を開始するが、湧水が多く作業が進捗しない。

10月３日　排水をしながら１号溝北側の掘り下げを行なう。

10月８日　１号溝南側の掘り下げを行なう。

10月16日　調査区中央にサブトレンチを掘る。土坑を確認。
10月17日　土坑の掘り下げを行なう。
10月23日　土坑の掘り下げを終了。
10月24日　包含層の掘り下げを行なう。
10月30日　包含層の掘り下げを終了。
　　トレンチの確認作業開始。
10月31日　本調査部分の調査を終了。
11月１日　トレンチ部分の表土剝ぎを再開。
11月５日　トレンチ部分の表土剝ぎを終了。
11月８日　トレンチ部分の調査を終了。
11月13日　埋め戻し作業を行ない、樋越遺跡における全調査終了。



第３図　遺跡全体図

第４章　検出された遺構と遺物

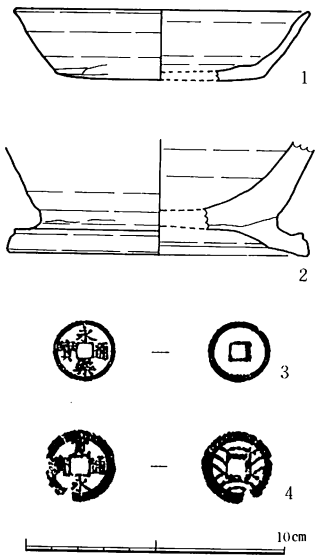
第１節　溝

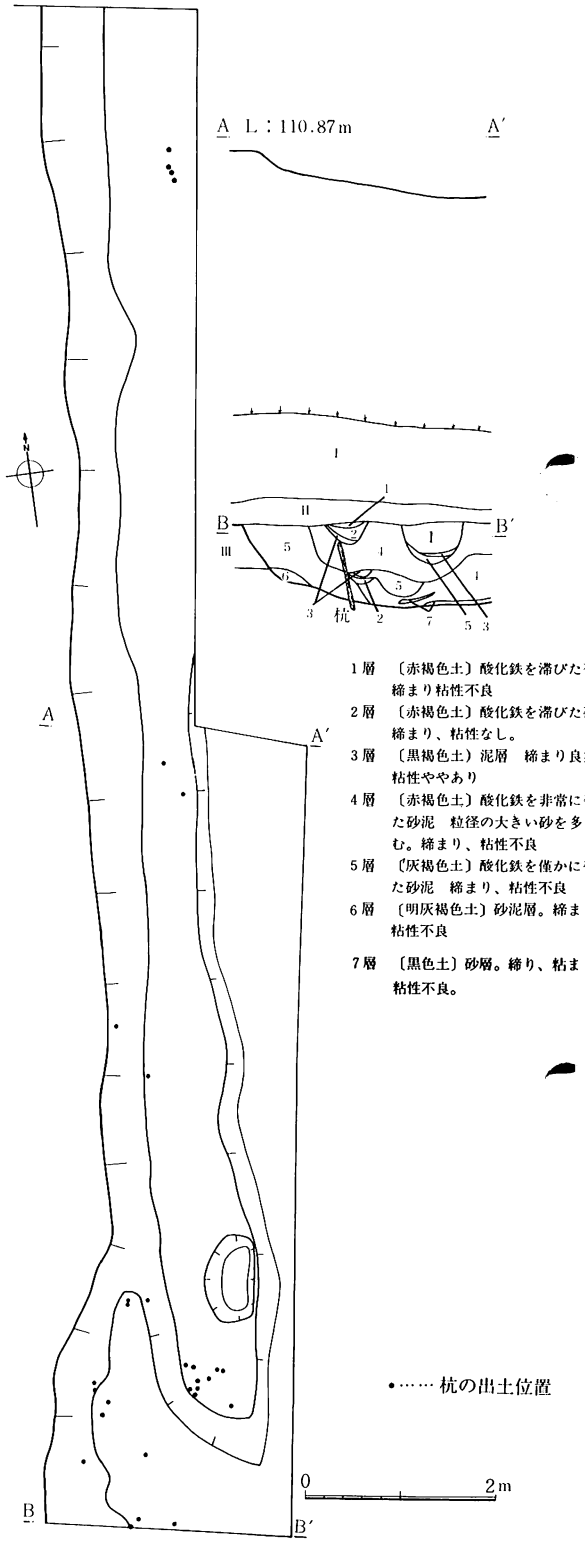
〔第４図、第１表、図版１－２、２－１〕

１号溝は、調査区の東端を南北に貫く溝である。溝の東側が発掘調査区域外のため、溝の幅は不明であるが、発掘範囲内では溝の南端で幅 2.5ｍ、深さ約 0.9ｍである。断面は中間に段を有し、底部は椀形を呈する。

旧水田面の粘質土層より掘り込まれ、黒色の泥層に達している。覆土は、砂泥の層から成り、酸化鉄を帯びた層が多く見受けられ、溝の中にさらに幅60cm、深さ45cmの小溝と、幅45cm、深さ25cmの小溝が形成されている。覆土中から非常に磨滅した土器の小片が検出された。

遺物は土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦、古銭など、古代から近代に及び、磨滅した状態で出土している。須恵器には坏、蓋、甕などの器種がある。土師器は特に磨滅が激しく、器種を識別しにくいものが多い。古銭は、永楽通宝と寛永通宝の２点である。また、極めて新しい木杭と竹杭が31本検出された。杭の先端は鋭角に削られ、底部の黒色泥層に打ち込まれていた。溝の幅が広くなる南側に集中する。





第４図　１号溝・同出土遺物

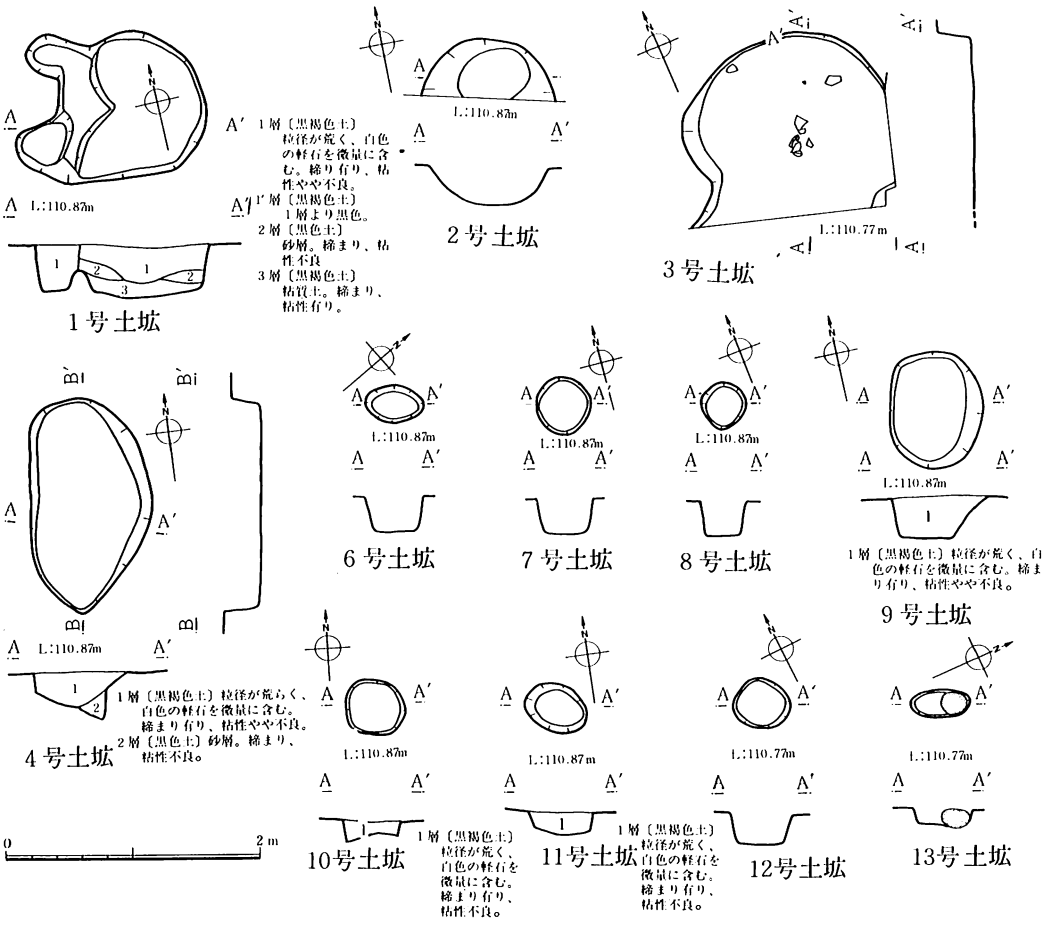
第１表　１号溝出土遺物観察表　　単位（cm）

番号	器　種	法　量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1	須恵器 坏	口　11.6 高　2.7 底　8.2	口唇部やや外反。 底部は丸味を持つ。	ロクロ整形。 底部・体部下端ヘラ削り。	ロクロ整形。	①灰色②還元③1/5④若干の礫を含む。
2	須恵器 瓶	口　－－ 高　－－ 底　11.8	高台を有す。	ロクロ整形。 底部ヘラ削り。	ロクロ整形。	①灰白色②還元③体部下端～高台部1/5④密
3	古銭	永楽通宝				
4	古銭	寛永通宝　裏面に波文				

第２節　土坑

〔第５・６図、第２表、図版１－４、２－２〕

全域で13基の土坑を検出した。



第５図　土坑

1号土坑　不整形を呈し、覆土は3層から成る。3号土坑に次いで遺物が多いが、全て磨滅した小片である。

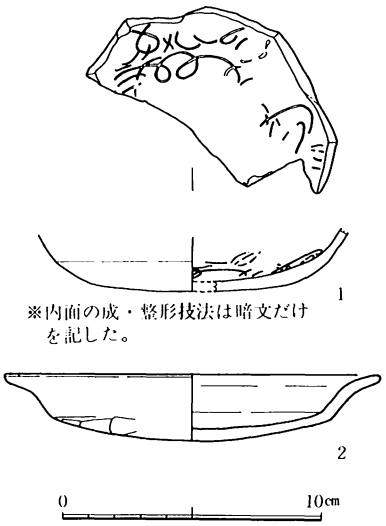
2号土坑　半円形で、サブトレンチによって南側を切られている。覆土は、黒褐色土（粒径が荒く、白色の軽石を微量に含む。）である。磨滅した土師器、須恵器の小片が少量出土した。

3号土坑　不整形を呈し、南西は撹乱によって切られている。覆土は黒褐色土（白色の軽石を微量に含む。）で、焼土の散乱が認められた。遺物は土坑の中で最も多く、土師器、須恵器片が多数出土した。土師器は坏、盤、薄手の甕片などが有り、遺物の主体をなしている。

4号土坑　楕円形を呈する。覆土は黒褐色土と黒色土である。遺物は磨滅した土師器、須恵器片が僅かに出土している。

5号土坑　径20cmの円形を呈し、覆土は黒褐色土（粒径が荒く、白色の軽石を微量に含む。）である。磨滅した土師器の小片が数点出土した。

6号土坑　楕円形を呈し、覆土は黒褐色土（粒径が荒く、白色の軽石を微量に含む。）である。



第6図　3号土坑出土遺物

7号土坑　円形を呈し、覆土は黒褐色土（粒径が荒く、白色の軽石を微量に含む。）である。

8号土坑　円形を呈し、覆土は黒褐色土（粒径が荒く、白色の軽石を微量に含む。）である。遺物は磨滅した土師器、須恵器片が少量である。

9号土坑　楕円形を呈し、覆土は黒褐色土である。土師器、須恵器片が僅かに出土した。

10号土坑　隅丸方形を呈し、覆土は黒褐色土である。

11号土坑　楕円形を呈し、覆土は黒褐色土である。磨滅の激しい土師器片が数点出土した。

12号土坑　円形を呈し、覆土は黒褐色土（粒径が荒く、白色の軽石を微量に含む。）

13号土坑　楕円形を呈し、覆土は黒褐色土（粒径が荒く、白色の軽石を微量に含む。）である。磨滅した土師器、須恵器片が少量出土した。

第2表　3号土坑出土遺物観察表

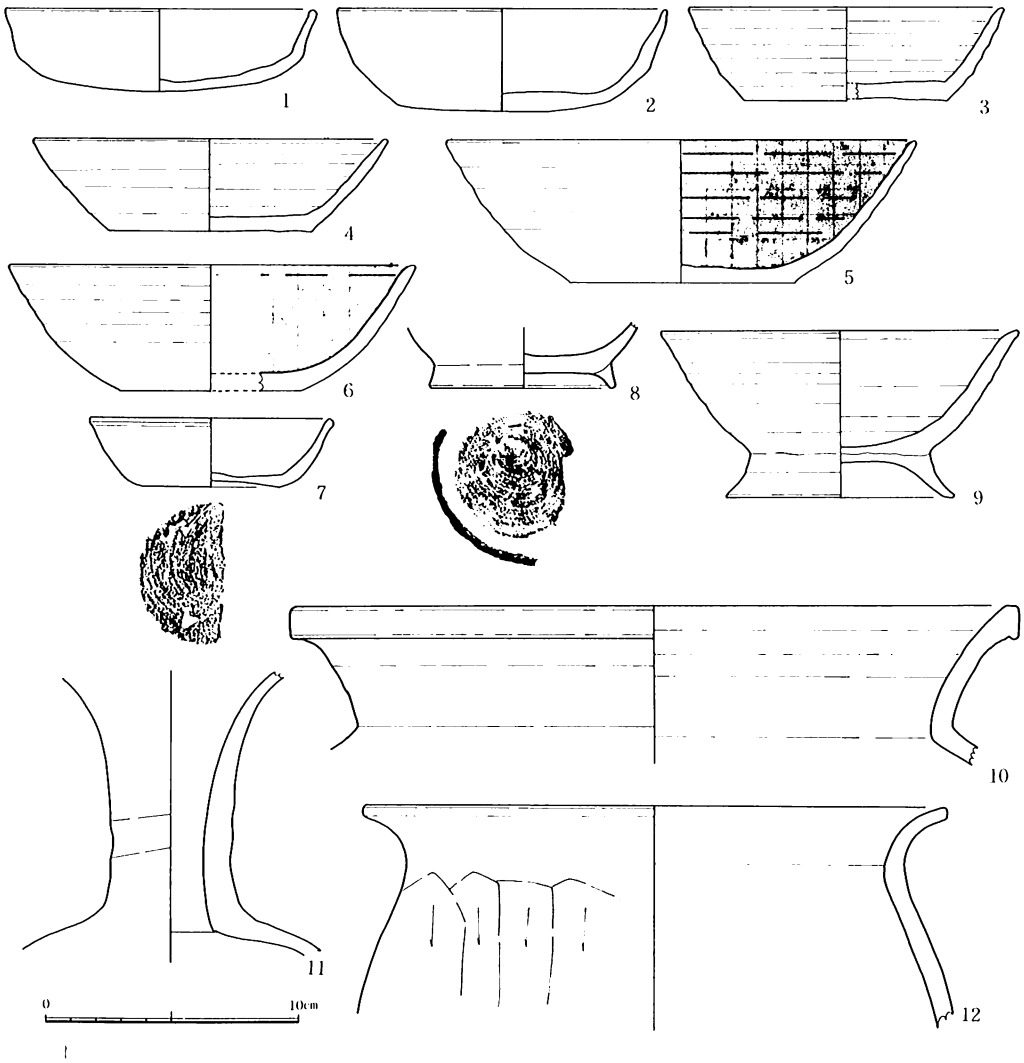
単位（cm）

番号	器種	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1	土師器 坏	口　－－ 高　－－ 底　－－	底部丸底。	体部下端ヘラ削り。 底部不明。	体部横撫で。 底部ヘラ磨き後、螺施状暗文を施す。	①赤褐色②酸化③体部下端～底部 1/3④若干の砂粒を含む。⑤磨滅大。
2	土師器 盤	口　14.6 高　2.6 底　10.8	丸底の底部と体部の境に稜を有す。口縁部強く外反。	横撫で。 底部ヘラ削り。	横撫で。	①赤褐色②酸化③口縁～底部 1/4④砂粒多し⑤磨滅大。

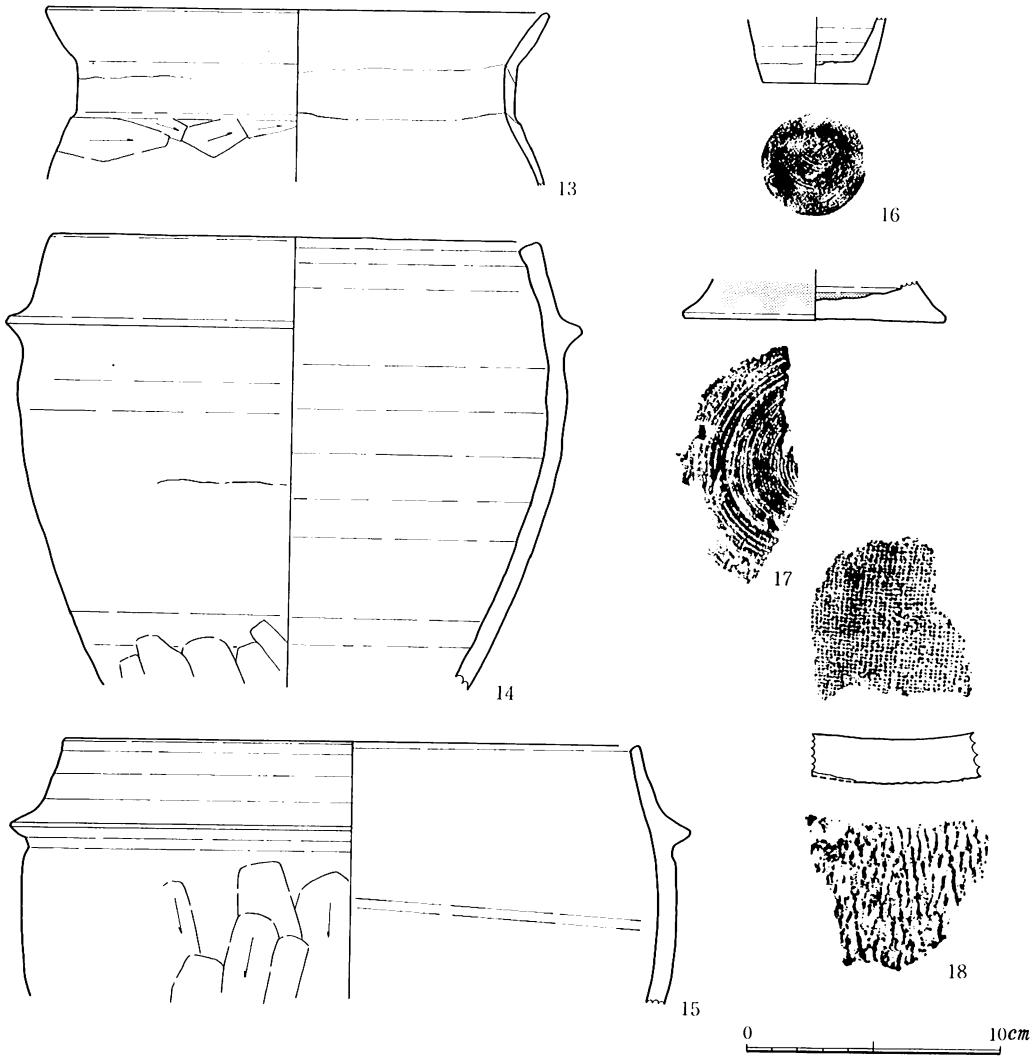
第３節　遺物包含層

〔第７・８図、図版１－３、２－３～12〕

ｄ－３グリッドとｅ－３グリッドを中心に奈良・平安時代の遺物が大量に出土した。標準堆積土層を基準にすれば、Ⅱ層、Ⅲ層から僅かではあるが非常に磨滅した土師器の小片や近代の磁器などが出土している。Ⅳ層、Ⅴ層からも土師器、須恵器片が磨滅した状態で出土しているが、Ⅱ・Ⅲ層よりも出土量が多い。近世、近代の陶磁器も数点出土している。Ⅵ層の中より遺物の大部分が出土し、ｄ－３グリッドとｅ－３グリッドに集中している。土師器、須恵器は散乱状態で出土し、磨滅が見られる。Ⅶ層からは若干の遺物が出土するが、Ⅷ層からは全く出土しなかった。遺物は土師器、須恵器が主体である。



第７図　包含層出土遺物(1)



第８図　包含層出土遺物(2)

第３表　包含層出土遺物観察表

単位（cm）

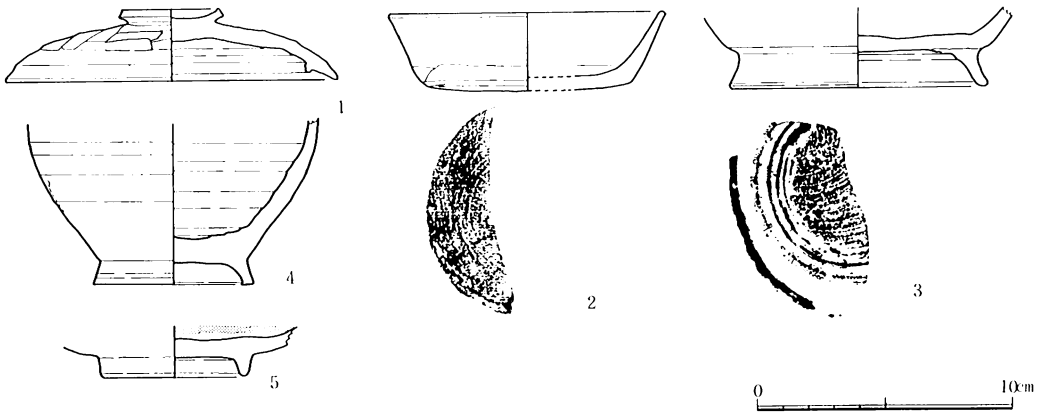
番号	器種 出土地点	法量	器形の特徴	外面の整形	内面の整形	①色調②焼成③残存④胎土 ⑤備考
1	土師器 坏 d－３G	口 12.2 高 3.3 底 9.6	緩やかな丸底。体部と口縁部を画する稜を有す。雑な作り。	体部下端ヘラ削り。 底部不明。	横撫で。	①赤褐色②酸化③ほぼ完形 ④砂粒・礫多し⑤磨滅大
2	土師器 坏 e－３G	口 13.0 高 4.0 底 8.6	体部と口縁部を画する稜を有す。雑な作り。	胎土の流れからロクロ使用と思われる。体部下端ヘラ削り。	不明。	①赤褐色②酸化③ほぼ完形 ④砂粒・礫を含む⑤磨滅大
3	須恵器 坏 e－３G	口 12.4 高 3.7 底 8.0	底部が広く、体部は直線的に立ち上がる。	ロクロ整形。 底部は回転ヘラ切り未調整。	口縁部横撫で。	①灰色②還元③1/5 ④黒色粒多し
4	須恵器 坏 e－３G	口 14.0 高 3.7 底 8.0	体部が直線的に立ち上がる。	ロクロ整形。 底部は回転ヘラ切り未調整。	ロクロ整形。	①暗灰色②還元③1/5 ④砂粒多し⑤内面灰かぶり

5	土師系 坏 e－3G	口 18.6 高 5.7 底 9.0	体部はわずかに内弯して開く。	ロクロ整形。 体部下端回転ヘラ削り。 底部は回転ヘラ削り。	ロクロ整形。ヘラ磨き（底部は放射状にヘラ磨き）。	①外面灰白褐色、内面黒色②酸化③2/3④砂粒を含む⑤内黒
6	土師系 椀 e－3G	口 16.0 高 5.0 底 7.0	体部はやや内弯して開く。	ロクロ整形。 底部回転糸切り未調整。	ヘラ磨き。	①灰褐色②酸化③1/4 ④砂粒を含む⑤内黒
7	土師系 坏 d－3G	口 9.7 高 2.8 底 7.0	底部上げ底。 口縁部わずかに外反。	ロクロ整形。 底部回転糸切り未調整。	ロクロ整形。	①灰白褐色②酸化③1/2 ④砂粒多し⑤磨滅
8	土師系 椀 c－3G	口 ―― 高 ―― 底 7.0	短い高台を有す。	ロクロ整形底部回転糸切り未調整。	横撫で。	①赤褐色・灰褐色②酸化 ③体部下端～高台部1/2 ④砂粒を含む
9	土師系 椀 e－3G	口 14.0 高 6.6 底 9.0	直線的に開く体部。 「ハ」の字状に開く高台。	ロクロ整形。	ロクロ整形。底部回転ヘラ削り。	①灰褐色②酸化③1/5 ④黒色粒・砂粒多し
10	須恵器 甕 e－3G	口 28.6 高 ―― 底 ――	口縁部に折り返し。	ロクロ整形。	ロクロ整形。	①暗灰色②還元③口縁部1/12 ④黒色粒礫多し
11	須恵器 長頸瓶 d－2G	口 ―― 高 ―― 底 ――		ロクロ整形。	横撫で。	①灰色②還元③頸部 ④砂粒多し
12	土師器 甕 e－3G	口 23.0 高 ―― 底 ――	口縁部がくの字状に外反。	口縁部横撫で。 体部縦位のヘラ削り。	横撫で。	①赤褐色②酸化③口縁～胴部1/6④砂粒多し
13	土師器 甕 d－3G	口 19.6 高 ―― 底 ――	コの字状口縁。	口縁部横撫で。 体部横位のヘラ削り。	横撫で。	①赤褐色②酸化③口縁～胴部1/4④砂粒多し⑤器肉が薄い
14	土師系 羽釜 d－3G	口 19.0 高 ―― 底 ――	口縁部内弯。 鍔は台形を呈す。	ロクロ整形。体部下端に斜めのヘラ削り。	ロクロ整形。 口縁横撫で。	①灰白褐色②酸化③口縁～胴部1/4④砂粒を含む⑤二次焼成を受ける
15	土師系 羽釜 e－3G	口 22.8 高 ―― 底 ――	口唇部につまみ出し。	口縁部横撫で。 体部縦位のヘラ削り。	横撫で。	①灰白褐色②酸化③口縁～胴部1/8④砂粒・礫を含む。
16	須恵器 不明 d－3G	口 ―― 高 ―― 底 4.2	底部からほぼ垂直に立ち上がる。	ロクロ整形。底部回転糸切り後、端部を回転ヘラ削り。	ロクロ整形。	①灰色②還元③底部④密
17	灰釉 不明 e－3G	口 ―― 高 ―― 底 10.4		底部回転糸切り。	ロクロ整形。	①灰白色・淡緑色 ②還元③底部1/2④密
18	瓦 e－3G	布目瓦				

第4節　トレンチ

〔第9図、図版1－5・6、2－13・14・15〕

2m×30mのトレンチを東西に3本設定して確認調査を行なった結果、溝7条、土坑8基を検出した。2号溝は幅約 2.5mで、南北の方向に走る。 覆土は溝の中央部に黄褐色土（粘質土）、両端が砂泥層であり、レンズ状に堆積していると考えられる。3号溝は幅約1mで、2号溝に併行して南北に走る。覆土は砂泥で、B軽石を充填していた。4・8号溝が2号溝を切り、6・7号溝が3号溝を切っている。覆土は黒褐色土である。14・17・18・19号土坑は、2号溝に掘り込まれ、覆土は黒褐色土である。15・21号土坑の覆土も同じであるが、14号土坑は、灰色砂泥を覆土としている。



第９図　トレンチ出土遺物

第５章　ま　と　め

発掘調査は全面調査の区域と、トレンチ３本による確認調査の区域の２つに分れている。全面調査の区域からは南北に走る溝と土坑が、トレンチ調査の部分からはやはり南北方向の溝と土坑が検出された。伴出遺物の多くは再堆積の疑いが濃く、土師器、須恵器、中世陶器などをもって遺構の時期を推定することは、かなり困難である。

１号溝は、旧水田の耕作土より掘り込まれている事から、極めて新しい用水路と思われる。溝の上面には旧水田の耕作土が約10cm堆積し、その後約80cmの盛土によって埋め立てられている。溝は水田が廃棄される以前に埋没していたと思われる。

土坑は、時期を決定するのが困難である。３号土坑の覆土には、焼土の散乱が認められ、遺物も多い。遺物は、８世紀代のものであるが、磨滅が激しく、流れ込みの可能性が強い。

包含層の遺物は散乱状態で出土し、磨滅が見られることから、流れ込みとも考えられる。樋越遺跡の西方約 350ｍの台地には元総社明神遺跡が存在し、平安時代の住居址が検出されている（註１）。また、本遺跡周辺は古代上野国の中心地であることから、本遺跡の付近にも奈良・平安時代の遺構が存在すると考えられる。

1　元総社明神遺跡Ⅰ　　1983　　前橋市教育委員会

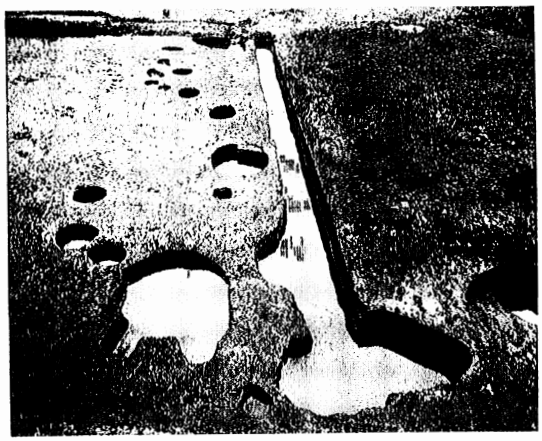
写　真　図　版

図版 1

1．本調査区全景

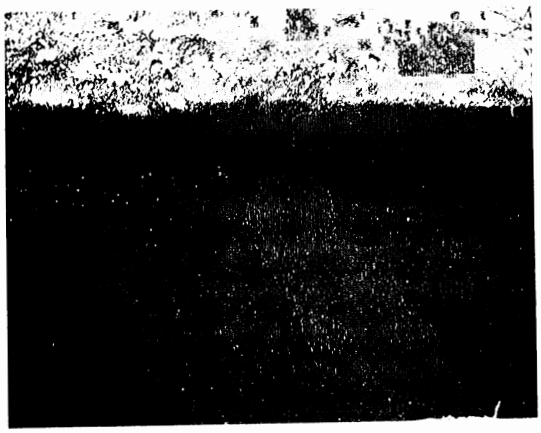
2．1号溝完掘状況

3．包含層遺物出土状況



4．土坑完掘状況

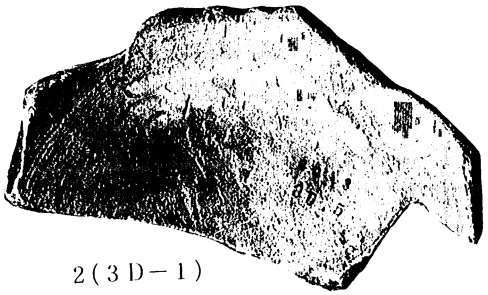
5．2号溝確認状況（第3トレンチ）



6．3号溝・16号土坑確認状況(第2トレンチ)

図版 2

1（1W－2）



2（3D－1）

3（包含層－1）

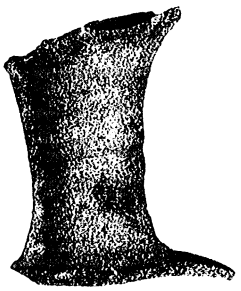
4（包含層－2）

5（包含層－4）

6（包含層－5）

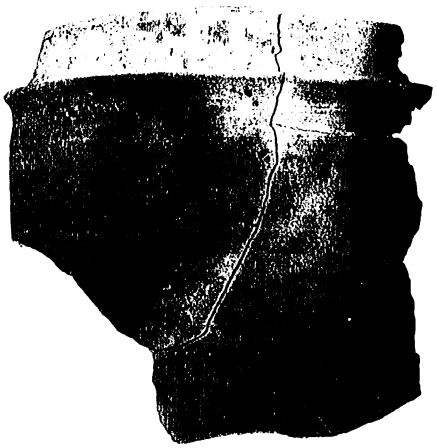
7（包含層－7）

8（包含層－9）



9（包含層－11）

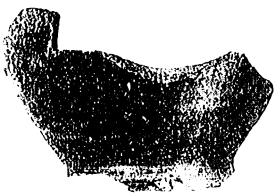
10（包含層－13）



11（包含層－14）

12（包含層－16）

13（トレンチ－1）



14（トレンチ－4）

15（トレンチ－5）

樋　越　遺　跡

印刷　　昭和61年３月１日

発行　　昭和61年３月26日

前橋市埋蔵文化財調査団

印刷製本　　株式会社

文化総合企画